

## 『歴代寶案』校訂本第二冊（活字本）の刊行に際して

沖縄県教育委員会 教育長 半嶺 満

沖縄県は、かつて琉球王国として、中国（明・清）との冊封・朝貢関係を軸に、その地理的優位性を發揮してアジア諸国と交易し、それらの国々から大きな影響を受けながら、独自の歴史・文化を育んできました。十四世紀から約二〇〇年の間、琉球は中国、日本、朝鮮、シヤム・パタニ（現在のタイ）、マラッカ（現在のマレーシア）、スマトラ・パレンバン・スンダ・ジャワ（以上現在のインドネシア）、安南（現在のベトナム）等の国々に船を派遣し、各地の産物を中継する交易を展開し、東アジアの一大貿易拠点として発展しました。

『歴代寶案』は、琉球がこれらの諸国と交わしたおよそ五百年にわたる外交関係文書を集めたものです。王府は、長く久米村の天妃宮に保管されてきた外交文書の破損・散逸を危惧し、外交を専任する久米村の人々にその編集を命じました。こうして一六九七年に第一集四九巻（一四二四年～一六九七年までの文書を収録）が二部作成され、王府と久米村にそれぞれ保管されることになりました。その後、第二集二〇〇巻・第三集一三巻（一六九七年～一八六七年）が編集され、ほかに別集八冊（うち第二集目録四冊）が編集されました。王府に保管された『歴代寶案』は廃藩置県の際に明治政府に貸し出されたとされていますが、その所在は依然として不明です。一方、久米村に保管されたものは、昭和八年（一九三三）旧県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸しました。

『歴代寶案』は、沖縄の外交史料であるばかりでなく、当時の東アジア世界の動向も知ることができる第一級の同時代史料です。しかしながら、膨大かつ難解な史料であるために、長い間、ごく限られた研究者の間でその存在が知られるだけでした。沖縄県は、平成元年度（一九八九）から、現存する各種の影印本や写本をもとに『歴代寶案』校訂本・訳注本の編集事業に着手し、平成三年度（一九九一）から刊行を開始しました。この編集事業の目的は、『歴代寶案』を広く普及し、琉球王国交流史の研究に役立てるとともに、県民の皆様が郷土の歴史を再認識し、あわせて国際社会に向けて沖縄の歴史・文化発信の基礎資料として活用することにあります。

本年度は、校訂本第二冊（活字本）を刊行いたします。『歴代寶案』第一集にあたる第一冊・第二冊は、久米村に保管されていたものを

直接撮影した青焼き写真が比較的よく揃っていたことにより、影印本として一九九二年に刊行しましたが、その後、第二集（第三冊）以降の活字による出版が進むにつれ、第一冊・第二冊についても活字化が計画され、歴代宝案補遺編として刊行することになりました。本書は令和三年（二〇二二）に刊行した校訂本第一冊（活字本）に続く、校訂本第二冊（活字本）となります。

『歴代寶案』第一集は、第二集以下がほぼ年代順に編集されているのとは異なり、内容によって分類されています。本書には洪熙元年から康熙三十五年（一四二五～一六九六）までの琉球国王が中国へ派遣する使節に発行する通交証明書・乗船証明書、琉球国王と南明政権との往復文書、琉球国王と朝鮮・東南アジア諸国との往復文書および乗船証明書、琉球の山南王と明朝が交わした文書および琉球国相懐機と旧港（パレンバン）との往復文書等が収録されています。琉球が朝鮮や東南アジア諸国と交わした文書から見える琉球の活動は、「万国津梁の鐘」（旧首里城正殿鐘）に刻まれた「舟をもって万国の架け橋となり、異国の産物や珍しい宝は国中にあふれている」の内容を裏付けるものです。また中国の明の滅亡後、明の遺臣たちが各地で王族を擁立して清に抵抗した政権を南明と総称しますが、『歴代寶案』に収録されたそれら政権と交わした文書は、同時代史料として貴重なものです。

最後に、本書の刊行につきましては、沖縄県歴代宝案編集委員会および同作業部会の御協力を得ました。また、本書の監修を担当された池谷望子・内田晶子先生をはじめ、関連史料を所蔵する各機関に御尽力・御協力いただきました。深く感謝するとともに歴代宝案編集事業に一層の御理解と御協力をたまわりますようお願い申し上げます。発刊のことばといたします。

令和五年（二〇二三）三月